HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大江 靖雄 編著, 『都市農村交流の経済分析』, 農林統計出版, 2017年
Author(s)	佐藤, 和夫
Citation	フロンティア農業経済研究, 21(1), 139-142
Issue Date	2018-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73034
Type	other
File Information	21(1)_21_sato.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

最も大きな養豚産地である九州、とくに宮崎県や鹿児島県を中心とする南九州での養豚経営の実態については触れられておらず、東北地域における養豚経営の展開上の特徴をより明確化するためにも、南九州の実態について触れる必要があったと考えられる。

第2に、本書では養豚における家族経営の競争力の解明を生産者出資型インテグレーションと関連させながら議論展開がなされているが、生産者出資型インテグレーションの展開における展望やそれに関わる課題等を含めた考察が行われていない。生産者出資型インテグレーションの今後の展開や問題意識に照らし合わせても極めて重要な点であったといえる。

いずれにしても本書は、養豚経営でのインテグレーションという今日の経営展開に注目しながら、豊富な事例にもとづいて分析がなされており、養豚経営を含む畜産経営の今後の展望を切り開くうえでも重要な示唆を与える書である。

大江　靖雄 編著
『都市農村交流の経済分析』

（農林統計出版、2017年）

酪農学園大学
佐藤　和夫

農村ツーリズムが農村地域振興の方策として、一定の地位を占めるようになって久しい。本書は農村ツーリズムを中心とする都市農村交流の多様な側面に関する計量分析の書であり、ツーリズムだけでなく、さらに大きな枠組みで都市農村交流を包括的に扱おうというものである。

まず、各章の内容を紹介しよう。

第1章の「都市農村交流活動の研究成果と経済学的評価」では、都市農村交流と農村ツーリズムという概念の規定が与えられるとともに、国内における農村ツーリズム研究について、2010年以前とそれ以降という2つの区分で、農業経営経済研究分野での研究動向が整理されている。

第2章から第10章までは、供給サイドの分析をおこなった論文が収録されている。

第2章「農業経営の多角化と所得評価基準－農村ツーリズムを題材として－」では、農村ツーリズムの所得評価基準の重要性が論じられている。現在の日本の制度では、農村ツーリズムによる収入は農外収入とみなされ、これが農業所得を超えると、農家内での専業なのに第2種兼業農家とされてしまう。このことについて著者は「農業生産関連事業の発展による所得増加が、非農業化を意味する第2種兼業化の進展に寄与することになり、農家としてのアイデンティティを強化するよりもむしろ喪失させる方向に作用」すると指摘している。そしてイタリアの経験と思考実験をもとに、現在の所得割合による専業・兼業評価区分を、労働時間を基準とした評価区分に移行することが、部門間の労働生産性を反映した経営多角化の推進

につながるという意味で望ましいと提言している。

第3章の「観光果樹園経営に及ぼす農村道路整備の効果」では、群馬県沼田市の観光果樹園を例に、インフラとしての農村道路整備の効果を検討している。従来の農道整備での主な効果は、農産物の流通コスト低下による供給曲線の右シフトによるものだったが、観光農業の場合は、来客のアクセス条件の向上により需要曲線が上方にシフトする可能性がある。このことを実証するために、道路が整備された地域でアンケート調査がおこなわれた。その分析から、道路沿地区の農家は非道路沿地域の農家よりも来客増加などの効果を強く認識しており、観光農業にとっての道路整備効果は、通常よりも大きくなると結論付けている。

続く第4章「観光梨園の販売価格と経営的要因との関連性－松戸市を対象として－」も観光果樹園の分析であり、観光梨園組合連合会に加盟する梨農家を対象に、ヘドニック・アプローチによって梨の庭先価格を分析している。ここでの分析仮説は、観光農園は通常の農園とは異なり、客が農園を訪れるという観光的側面を有するために、梨自体の質だけでなく、梨園としての魅力も梨価格の形成に影響する、というものである。分析結果から、一般的な梨の評価項目を含まないという注釈つきではあるものの、梨園自体の持つ魅力が梨の販売価格に影響していることが実証されている。

第5章「都市農業としての体験農園の経営的可能性－練馬区農業体験農園を事例として－」は、練馬式（農園利用方式）体験農園の経営に関する分析である。この方式を採用している市民農園経営者への聞き取り調査から、都市農業としての市民農園を存続させるための位置付けについて検討している。

第6章「交流型漁業経営の効率性評価－千葉県木更津市簀立て体験活動を事例として－」では、木更津市の「簀立て」と呼ばれる伝統的な定置網漁法の体験活動を対象に、交流型漁業（「ブルー・ツーリズム」）経営の効率性について、DEA（包絡分析法）を用いて分析している。

第7章「インターネットを利用した農産物産直の効果と経営者意識」はホームページを開設している農業経営者を対象とした意識分析である。2000年に行われた調査であり、ネット産直創世期における実態の記録として、今後も参照される価値があるだろう。

第8章「コシヒカリのインターネット販売価格に関する決定要因－新潟県農業法人を対象として－」では、新潟県におけるコシヒカリのインターネット販売価格に対する公開情報の影響について、ヘドニック・アプローチを用いて評価している。その結果から、「有機JAS認証取得」や「米・食味分析鑑定コンクールでの受賞歴」などが、大きめの価格プレミアムを持つことを示している。

第9章と第10章は、いわゆる農業の多面的機能を対象とした分析である。第9章「農地が持つ防災機能の経済評価－東葛飾地域を対象にして－」は都市近郊農地の持つ防災機能の経済評価である。具体的には千葉県東葛飾地域の10市町を対象として、まず地域の安全度を主成分分析で評価したうえで、都市農地と都市公園の代替可能性を検討し、代替法を用いて都市農地の防災機能の経済評価をおこなっている。

第10章「農業教育機能サービスの結合性に関する実証的評価」では、農業の結合生産物としての「教育機能」について、技術的結合性と制度的結合性という観点から、全国の農業体験施設のデータを分析している。体験サービスを作物別体験、作業別体験、食文化体験、農村文化体験の4種に区分して、実施主体間での提供状況の違いを分析した結果から、季節性への対応や部門間での連携に関する提言をおこなっている。

第11章から第17章までは、需要サイドの分析をおこなった論文が収録されている。

第11章「農村ツーリズムの需要特性」では、

up-marketかつニッチ市場であると言われる農村ツーリズムの需要者の分析において、農村選好決定関数の計測という方法が取られている。具体的には、観光に関する既存の実態調査のデータを用い、もぎ取り農園の訪問者のプロファイリングが試みられている。

第12章「グリーン・ツーリズムに対するニーズ評価」では、農村ツーリズムにおいて、どのような属性を有する人々がどのような体験を希望するのか、「体験」、「自宅からの距離」、「価格」を属性とするコンジョイント分析で分析している。分析の結果、女性は文化体験の部分効用値が高いこと、そば打ちのような食に直結する加工体験が一般的に好まれることなどが明らかになっている。

第13章「千葉県における農村ツーリズムの需要動向と要因－遊園地需要と比較して－」では、都市型観光と農村ツーリズムが併存する千葉県を対象として、入込観光客数を「遊園地」、「ブルー」（海や川といった水環境と触れ合う観光形態）、「グリーン」（農場や森林といった自然環境と触れ合うような観光形態）、「ブルーグリーン」（「ブルー」＋「グリーン」）という4つに区分し、二段階計量モデルによって、相互の影響について分析している。その結果、「ブルーグリーン・ツーリズム」への需要は、東京ディズニーリゾートに代表される遊園地と競合関係にあること、景気変動やガソリン価格の影響を受けていること、などが明らかにされている。

第14章「山形県における地域文化的資源と観光需要との関連性」では、文化資源が観光客に与える影響について、計量的な解析がおこなわれている。具体的には山形県の35市町村における観光客数について、文化的資源などを説明変数とした重回帰分析に加えて、地域産物を取り扱う経営体数の推定値を組み込んだ二段階の重回帰分析をおこなっている。その分析結果より、従来からある歴史的建造物や温泉施設等の観光施設が強い誘因効果を示していること、郷土料理等の食の文化的資源に関わる地域産物取引主体数が強い影響を与えていること、の2つの結論を出している。

第15章「自治体アンテナショップの消費回遊行動とその特性－銀座・有楽町地区を対象として－」では、地方自治体のアンテナショップが集積している東京・銀座を対象に、回遊マルコフモデルを用いて訪問者の周遊行動を分析し、同時に訪問者の特性に関するコレスポンデンス分析をおこなっている。その結果、アンテナショップ訪問者の回遊行動には、アンテナショップ店舗同士の影響と地区の関連施設の影響があり、集客のためにはこれらの施設との連携を強化することが必要だとしている。

第16章の「震災被災地における観光入込客数の回復過程－都市・農村・離島地域の比較から－」は、大きな震災を経験した3つの地域として、都市型に分類される神戸市（阪神・淡路大震災）、農村型の新潟県旧川口町（新潟県中越地震）、離島型の奥尻町（北海道南西沖地震）を取り上げて、被災からの観光客数の回復過程を比較分析するという、おそらく他に類例のない研究である。ここでは震災による観光入込客数の急激な落ち込みと回復（屈曲）を捉えるために、スプライン関数を用いた重回帰分析がおこなわれている。計測対象期間内に観光入込客数が震災前の水準まで回復したのは都市型の神戸市のみであり、農村型の旧川口町、離島型の奥尻町では、復旧復興財源が観光業の回復には繋がっていないことなどが結論として述べられている。なお本章では、分析の一部に対応した計測結果が省略されている。読者はぜひ、初出誌にあたってほしい。

第17章「中国東部沿岸部における農村ツーリズム観光客の意識要因－江蘇省傅家辺農業科学技術公園を対象として－」では、中国沿岸部における農村ツーリズムとして、江蘇省にある農業科学技術公園への来訪回数の決定要因を順序プロビット

モデルで解析している。分析結果からは、郷土文化に興味を有しているほど来訪回数が多くなることなどが示されている。

第18章「政策的示唆と今後の展望」は本書のまとめである。今後の農村ツーリズムの発展に重要なポイントとして、農村ツーリズム経営者能力の向上、ホスピタリティに関する考察の深化と政策的支援、インバウンド・ツーリズムへの対応、都市農村交流を若い世代のための自律的ビジネスに育成すること、の 4 点が指摘されている。

本書には非常に多くの実証分析が収められているため、内容紹介に紙幅のほとんどを費やしてしまった。最後に短く評者の感想を述べたい。

本書の特徴として、実に多様な分析手法が用いられていることがあげられる。実証分析において、理論と完璧に整合するようなデータや手法が利用可能であることは少ない。多くの場合、入手可能なデータと適用可能な分析手法の組み合わせのなかから、最善の方法を探索することになる。本書における分析手法の多様性は、都市農村交流という比較的新しい分析対象にどう接近するかという課題に対して、著者たちが真摯に向き合った結果だと思われる。初出における字数制限の影響もあってか、分析方法の詳細をもう少し知りたいと感じる章はあるものの、収められた多くの事例研究において著者らが辿った思考の道筋を追えば、読者は、研究者が新しい分析対象と切り結ぶ、その手触りを味わうことができるだろう。この分野のみならず、計量分析を志向する若い研究者に本書を薦める所以である。

また、本書に収められた実証研究は、編著者らの指導による卒業論文や修士論文をベースとして学術誌に発表した論文を、加筆修正したものである。その意味で本書は、実証研究教育の成果集という側面をもあわせ持つ。教育者の末端に連なる者として、この豊かな成果に対して羨望の念を禁じ得ないと付け加えれば、蛇足になるだろうか。